

コミュニケーション概念におけるキリスト教的側面
—パウロとコムニカチオ—

神門 しのぶ

清泉女学院短期大学

**The Notion of Communication Having a Borrowing
from Christianity: St. Paul and *Communicatio***

GOTO Shinobu

Seisen Jogakuin College

1 はじめに

本誌 XI 号ではコミュニケーションという語について、1989 年版の *Oxford English Dictionary*¹ を参照し、語源に関する説明と初出時の意味を検討することによって〈いつくしみをもってなされる物心の共有〉と定義した²。ここには、今日、情報や意思といったマテリアルな何かを伝えるという意味で使われる時にほとんど意識されない要素が含まれる。それは、神が喜ばれるようなありかたで人が誰かと何かを分かち合う態度であり、英単語 *communication* の初出が新約聖書の第二コリント書 9 章 13 節の英語訳(宗教改革家ウィクリ

¹ 以下 *OED*。

² 神門しのぶ「語源に見るコミュニケーション概念の本質—隣人愛との接点—」*HUMANITAS CATHOLICA*, Vol. XI、清泉女学院大学・短期大学カトリックセンター、2022 年、17-28 頁。

フ (Wyclif(fe), John 1320/30-1384) による) の中にみられることに基
づいて導かれた結論であった。

1989 年版 *OED*³ は英単語 *communication* の基本情報として、この
語が、ラテン語の単語 *communicatio* から「古期もしくは中世フラン
ス語 (Old French)」に入ったのち、英語に入ってきたということを示
していた⁴。いっぽう、オンライン上の最新 2023*OED* では内容が
更新され⁵、英単語 *communication* の語源 (etymology) の欄に、この
語はフランス語とラテン語の双方に複合的な起源 (multiple origins)
を有するとの説明がある⁶。

コミュニケーションという語は日本でカタカナ言葉として多用さ
れているが、その“経歴”を擬人化して示してみると、さしずめ次
のようになるだろうか。①キリスト教化前にラテン語として生まれ、
②キリスト教の影響の色濃いフランス語圏で子ども時代を過ごし、
③長じて英語として活躍するようになった⁷。この②について、XI
号拙稿では考察を先送りしていた。そこで本稿では、コミュニケー
ションという語がウィクリフによって 14 世紀に英語に持ち込まれる
前に⁸、フランス語圏ではどのような意味で用いられていたのかとい
う点に関心を置き、XI 号で導出した定義を補強したい。手始めに、
まず 2023*OED* を参照し、先に述べたこと以外に何か新しい傾向は

³ 以下、これを 1989*OED*、同様に 2023 年版を 2023*OED* と略す。

⁴ “communication”, J.A. Simpson & E.S.C. Weiner eds., *The Oxford English Dictionary Second Edition*, 3 cham-Creeky, Clarendon Press, 1989, p. 578.

⁵ <https://www.oed.com/search/dictionary/?scope=entries&q=communication>,
accessed on 2023.12.27.

⁶ “Partly a borrowing from French. Partly a borrowing from Latin”.

⁷ 2023*OED* の語源の欄には、古オック語、カタロニア語、スペイン語、ポ
ルトガル語、イタリア語それぞれにおける、*communication* という語の歴史
も比較せよとの指示がある。

⁸ 正確には、*OED* が把握している具体的な初出例が 14 世紀のウィクリフに
よるものであり、それとは別に、英単語としての出現の始期は Middle
English period(1150-1500)であろうと考えられている。脚注 5。

ないか探してみよう。

2 2023年版 OED による英単語 **communication** の語義説明

コミュニケーションという語はきわめて多義的な名詞であるが、2023OED はその意味を二群に分けて整理している。第 I 群は、「親近性あるいは結びつき (affinity or association)」に関する意味であり、第 II 群は、「何かを分け与えることあるいは伝達すること (the imparting or transmission of something)」に関する意味である。そして各群の下位に複数の意味が配置されている。大まかに主意を和訳して略記すると次のようになる。

I 親近性あるいは結びつきに関する意味

- i (廃語) 誰かと何かを共同に持つこと、親近性、一致
- ii 人間相互間の接触、社会的相互作用、結びつき、交際⁹
- iii (今では稀) キリスト教用語で、ミサに出ること
- iv フリーメーソン用語で、定期的な会合

II 何かを分け与えたり伝達したりすることに関する意味

- v [この記述無し: 筆者注]

1989年版と2023年版とで **communication** の語義に大きな変化はないが、整理の仕方が違う¹⁰。上記では、2023年版においては第 i 義から第 v 義までで意味が終わっているように見えるが、実際には第 v 義が更に分かれて、“何か”の部分(「情報」「知識」「考え」「データ」等)の違いに応じて説明が続いていく。たとえば第 v 義の枝番 a には、「何か(熱、感情、動き等)を伝える行為、あるいは、分ける

⁹ “Interpersonal contact, social interaction, association, intercourse.”

¹⁰ 2023OED に挙げられているウィクリフ英訳聖書の初出情報の掲げ方にもやや異なる点があるが、本稿の結論を左右するものではないため、煩雑さを避けて言及しないこととする。

ために何かを与える行為。何かが物質であることは今では稀。ただし、情報の伝達手段としての紙等の物質は除く」¹¹とあり、つづく枝番 b には、「話し言葉や書き物や電子メディア等による情報・知識・考えの伝達や交換」¹²とある。対する 1989 年版では、語義が二群に分けられることなく、第 1 義から第 12 義までが順番に並んでいた。

2023OED の語義説明の中で一つ興味深いことがある。それは、I の ii すなわち「人間相互間の接触、社会的相互作用、結びつき、交際」という意味と、II の v の枝番 b すなわち「話し言葉や書き物や電子メディア等による情報・知識・考えの伝達や交換」という意味は、「しばしば区別が難しい (Often hard to distinguish)」と指摘されている点である。これら二つの意味は、よく見てみると、そのどちらもが、今日私たちが通常コミュニケーションというカタカナ言葉に持たせている意味であると気づく。I-ii は、コミュニケーション概念のうち、人と人との交わりやふれあいといった側面を、また II-v-b は情報伝達や意思疎通といった側面を表している。前者と後者はそれぞれ、コミュニケーションという行為が担っている価値ある役割の中で、不可視な部分と可視的な部分、と言い換えてもよいかもしれない。

一般に、二つの物の区別が難しいという現象は、二つの物が両者相まって一つであることの裏返しではないだろうか。辞典の語義説明というものは、人間が現実の言語生活の中でどのようにその言葉を理解して用いているかという事実を反映するものであろう。だとすれば、2023OED の説明が示唆しているのは、英単語 *communication* を用いる人びとにとって *communication* という行為は、不可視な部分の意義と可視的な部分の意義の両方を分かち難く併せ持つ行為で

¹¹ “The action of communicating something (as heat, feeling, motion, etc.), or of giving something to be shared; Now *rare* with reference to material objects, except as the vehicles of information (letters, papers to learned societies, magazine articles, etc.)”.

¹² “The transmission or exchange of information, knowledge, or ideas, by means of speech, writing, mechanical or electronic media, etc.”

あるという理解が、意識的ではないとしても、されているらしいということである。このことは、カタカナ言葉の「コミュニケーション」の使用時においてもまた、言い換えると、日本語話者である筆者や日本人一般の言語活動を見渡した場合にもまた、共通であると思われる。というのも、たとえば私たちが、「コミュニケーションは大事だ」と言う時、何を伝えるかという「何を」の部分だけが大事だと言っているのではなく、どんな態度で伝えるか、何を「どう」伝えるかも同じくらい大事だと考えてそのように言う場合がほとんどだからである。

3 ブレーズ編『キリスト教著述家羅仏辞典』から分かること

ラテン教父の著作を読む研究者にとって必携の参考書に、ブレーズ (Blaise, Albert 1894-?) が編んだ『キリスト教著述家羅仏辞典 (*Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*)』がある¹³。その特徴は、ラテン語の単語が有している世俗的な意味とは別に、キリスト教界の著述家がどのような意味で用いていたかが、用例とその出典とともに載っていることである。それゆえ、この辞典で *communicatio* の項目を引けば、このラテン語単語がキリスト教的文脈ではどんな意味を持つ言葉なのか／だったのかを知ることができる。集められている用例は、ラテン語によるキリスト教関連の作品がある著述家たちのものに加え、ラテン語聖書内からのものである。用例収集の対象年代の始期と終期は、テルトゥリアヌス (Tertullianus) に代表される「キリスト教文学の始まり」から「メロヴィング朝時代末期」までと謳われているので¹⁴、大雑把に言えば 3 世紀から 8 世紀末までということになるだろう。ちなみに、この終期以降、フランス語

¹³ Blaise, A., *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*, Éditions Brepols S.A., 1967.

¹⁴ *Ibid.*, p.7. なお、用例の一部には小セネカ、タキトゥス、クインティリアヌスといった、ローマ帝国時代初期の非キリスト教著述家のものも含まれる旨の注記がある (*Ibid.*, p. 29)。

をはじめとするヨーロッパ諸言語はラテン語を母胎としながら固有の言語として確立していく¹⁵。

本稿冒頭では比喩を用いて、**communicatio** という、ラテン語として生まれた“子ども”のことを、「②キリスト教の影響の色濃いフランス語圏で」育ったと表現してあった。だがこの辞典で分かることは、この **communicatio** がキリスト教の影響の色濃い文化圏で」どう育ったか、すなわちどんな意味を与えられていたか、であり、その説明がフランス語で書かれているにすぎない。この点をはっきりさせておかなければならない。したがって、「はじめに」で述べてあった、「フランス語圏ではどのような意味で用いられていたのかという点に関心を置」いて行う作業は、フランス語が言語として確立する以前に、後年フランス語圏となる地域を含むラテン語圏において、ラテン語 **communicatio** がどのようなキリスト教的概念であったかを調べる、という作業をもって代えたい。

では、いよいよこの辞典で **communicatio** を引いてみよう¹⁶。語義は大きく二つ載っており、それぞれに豊富な用例が出ている。大まかに主意を訳すと、第一義には「知らせる・分割する・分配するという行為 (*action de communiquer, de partager, de faire part*)」と、「施しを介して兄弟と財産に関わる行為 (*action de faire prendre part à ses biens (ses frères, par l'aumône)*)」の、二つの説明があり、後者の用例の筆頭が、XI号拙稿で取り上げた第二コリント書8章4節になっている¹⁷。しかし、ここで特に注目したい別の用例がある。それは“*Caritas, Gratia, Communicatio*”という用例で、多少なりともキリスト教会の言葉づかいに慣れ親しんでいる者に、三位一体の定式文〈神の愛、キリストの恵み、聖霊の交わり〉を連想させるものである。

¹⁵ 泉井久之助『ヨーロッパの言語』岩波書店、2018年(1968年)、6頁参照。

¹⁶ Blaise, *op. cit.*, p. 176.

¹⁷ 用例として“*communicatio ministerii, 2 Cor. 8, 4*”とあり、XI号拙稿では「奉仕という性質を持つコムニカチオ」と直訳した。新共同訳では「慈善の業と奉仕」と訳されている箇所の一部をなす。

ただしその出典は、パウロ書簡の第二コリント 13 章 13 節の「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように¹⁸ (*gratia Domini nostri Iesu Christi et caritas Dei et communicatio Sancti Spiritus cum omnibus vobis*)¹⁹。」ではなく、“MAR.-VICT. *Hymn.*”と記されている。この情報について略語の解説を読むと、じつは若干判断に迷う記述になっているものの²⁰、内容から見てマリウス・ウィクトリヌス (281/91-365/86) の『讃歌』を指していると考えて問題ないだろう²¹。

なお、第二義はより専門性の強いキリスト教用語であると考えられるもので、「改悛の後で」すなわち異端や異教から回心した後に許可される、教会共同体への参加、と受け取れる説明がある²²。その後が続く複数の用例を総合して推測するならば、初期キリスト教会の歴史において、ミサ儀式には、回心した罪人や元異端者に参加が許される部分と許されない部分があり²³、その許される部分に参加する権利のことも、*communicatio* と称したようである。さらには、「ミサの聖体拝領後の部分を言う場合に、*communio* という言葉以外に、より頻繁に使われる言葉」²⁴といった説明も続くが、詳細は省く。

¹⁸ 新共同訳。

¹⁹ *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1994, p. 1802.

²⁰ *Hymn.*と略されるところの *Hymnus* という作品は、マリウス・ウィクトリヌスの作品リストではなく偽 (Pseud) マリウス・ウィクトリヌスの作品リストに属することになっている (Blaise, *op. cit.*, p. 21)。

²¹ 田坂さつき「解説」上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999 年、434 頁参照。当該箇所直後で、ウィクトリヌスはまさにパウロの 2 コリ 13:13 から引用を行っている。

²² “*participation à la vie de l’Église (après la pénitence), faculté de participer au culte (accordée aux pécheurs, aux hérétiques réconciliés), communion, paix, réconciliation*”。

²³ 神門しのぶ「司教アウグスティヌスの教育活動」『アウグスティヌスの教育の概念』教友社、2013 年、104 頁参照。

²⁴ “*qqfs. se rapprochant du sens postérieur de communion eucharistique, pour*

4 パウロとコムニカチオ—フランシスコ会聖書研究所の聖書訳注から分かること—

XI号の考察では、ラテン語聖書のどこにどれだけラテン語の単語 *communicatio* (コムニカチオ) が出てくるかを調べたわけではない。英単語 *communication* の初出情報として *OED* が編集時に把握していた具体例が、ラテン語聖書をウィクリフが英訳した時のものだというだけのことである。したがって、コムニカチオというラテン語はパウロ書簡以外でも使われているだろう²⁵。とはいえ、コリント人への第二の手紙という一つの文書の中に、XI号拙稿で取り上げた2か所(8章4節、9章13節)の他に、前節で言及したようにもう1か所、つまり3つ目のコムニカチオが出てくることは興味深い²⁶。全13章からなる第二コリント書の最後部(13章13節)に出てくるこの第3のコムニカチオは、フランシスコ会聖書研究所によるパウロ書簡口語訳に付された注によれば、「本書全体の結語」²⁷と見なしている部分(13章11-13節)に属している。そこで、第二コリント書という一つのまとまりを持った全体を締めくくる際に用いられているということを重く捉えるならば、他の2つのコムニカチオに比べて、ここからは何か特別な意味を引き出し得る可能性が考えられるのである。

じっさいに、第3のコムニカチオは通常日本語で「聖霊の交わり」と表される語句の「交わり」という部分に相当するのであるが、フランシスコ会の解説は「聖霊の交わり」という語句を、あたかもある種の思想として位置づけている。それは、パウロが聖霊に由来するこの交わりをどのように解しているかについて、〈キリスト者と、父である神および子であるキリストとの交わり〉と〈キリスト者と、

lequel d'ailleurs le mot *communio* a toujours été plus fréquent”.

²⁵ シラ書 13:22 や使徒言行録 2:42 でも使われている。BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM, p. 1045, p. 1701.

²⁶ 筆者が数えたところ、第二コリント書にはこれら3か所だけであった。

²⁷ フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書—原文校訂による口語訳パウロ書簡 II (一・ニコリント)—』サンパウロ、2008年、246-247頁、注(10)。

他のキリスト者との交わり」という、質の異なる二種類の交わりを可能にするのが聖霊の交わりというものなのではないか、との解釈によってである²⁸。ここで思い出されるのが、本稿第2節で明らかになった、今日コミュニケーションという単語を用いる時に人びとがおのずと含意しているにちがいない要素である。具体的に言うならば、コミュニケーションという行為を成り立たせている、不可視の部分と可視的な部分という二つの要素である。天の父および御子キリストと、キリスト者を結ぶ絆は、言うまでもなく目に見えるものではない。それに対し、キリスト者と、他の人間との関係は、相手が目に見える相手であり、実際的な交際であるという意味で言えば、可視的な関わりである。

5 むすび

今回の考察から、コミュニケーションという普段あまり深い意味を与えられることなく多用されている言葉に、漠然とではあるが、パウロ思想とのつながりが予測される示唆が得られた。だが、XI号で提起されたコミュニケーション概念を補強したと言うには、これだけではまだ貧弱である。そもそもコムニカチオというラテン語は、「達者なギリシア語で語り、また書いた」²⁹パウロ自身が使用した語ではないのだから、この先の研究課題の設定には、より学術的な正確さが求められるだろう³⁰。よって、さらなる考究は今後の課題とする。

²⁸ 同上。

²⁹ 八木誠一『パウロ』清水書院、2000年（1980年）、11頁。

³⁰ たとえば八木誠一は、コミュニケーションという概念について、やはりラテン語にまで遡った上でそれを「広い意味で共同体形成行為」とであると捉えており、その論拠にイエスの言動およびパウロの愛の概念を置いている（「イエスは何を語ったのか？—イエスの思想の現代的意義—」『モラロジー研究』No.57, モラロジー道德教育財団、2006年、1-32頁）。そうした先行研究に学ぶ手順を欠くわけにはいかない。